

〈原著論文〉

携帯電話の利用とインターネット依存傾向や友人関係との関連

Relations between Use of Cellular phone, Internet addiction disorder and Friendship

小野 淳¹, 古賀 敦美²

要旨

近年、若年層が携帯電話を持つことも当たり前になり、インターネットを利用する若者が増加していることによって、SNSなどによるいじめやネット依存の問題が深刻化してきている。本稿では、携帯電話の利用状況により、インターネット依存傾向や自尊感情に違いが生じるのか、友達関係に影響があるのかについて調査を行った。その結果、女子大学生が携帯電話を持ち始めた時期は、インターネット依存傾向や自尊感情、友人関係尺度に影響があるとは言えない結果となった。また、携帯電話の1日平均使用時間が長いほどインターネット依存傾向が高く、人と関わっていた気持ち強いという傾向が見られた。ただ、今回の調査は女子大学生が対象であったため、今後、男子大学生を対象とした調査が必要である。

キーワード：携帯電話，インターネット依存，友人関係

Cellular phone, Internet addiction disorder, Friendship

はじめに

近年、急激なインターネットの普及により、若年層でのインターネット利用率も増えてきており、その主となる端末は携帯電話であると考えられている。若年層が、携帯電話を持つことが当たり前になってきている現在、インターネットを利用する若者が増加し、携帯電話等の利用からSNSなどによるいじめやネット依存の問題が深刻化してきている。

また、文部科学省による小中学生の携帯電話等の利用に関する調査(2009)⁽¹⁾では、携帯電話をよく使う子どもは、睡眠時間や食事などの生活面への影響が出ていることが報告されている。このことから自我が確立されているとはいえない小中学生は、インターネットの使用に関して自己抑制ができず、依存傾向が強まることが予想されており、この依存状態を引き起こさないためにも自尊感情を学童期に培う必要があると考えられる。

本調査では、女子大学生を対象として、現在の携帯電話の利用状況や携帯電話を使用し始めた時期により、ネット依存の傾向や自尊感情、友達関係に関する影響について質問紙により調査を行う。

1. 先行研究

白石ら(2011)⁽²⁾は、女子大学生を対象として、自尊感情の程度とインターネット依存傾向との関わりについて検討した。質問紙は、携帯電話を持つようになった時期、1日のうちで携帯電話やインターネットを使う平均時間、インターネット依存傾向項目およびRosenberg自尊感情尺度の日本語版から構成され、無記名で調査を行っている。

携帯電話を持つようになった時期は、中学校が最も多く41.5%で、高等学校が24.8%であった。また、携帯電話の1日の平均利用時間は、150分以上が調査対象者の半数以上を占め、全体の62.1%であった。

インターネット依存傾向得点と自尊感情得点の相関関係を調べたところ、弱い正の相関が認められた。

携帯電話の使用時間とインターネット依存傾向得点との関係を一元配置分散分析で解析したところ、おおよそ携帯電話の使用時間が長いほど、インターネット依存傾向得点が高い傾向が認められた。続いて、携帯電話の使用時間と自尊感情得点との関係を一元配置分散分析で解析したところ、有意な差は認められなかった。

1 Atsushi ONO

千里金蘭大学 生活科学部 児童教育学科

受理日：2016年9月10日

2 Atsumi KOGA

千里金蘭大学 生活科学部 児童教育学科

査読付

また、携帯電話を使用し始めた時期との関連を同様に調べているが、携帯電話の使用開始時期ではインターネット依存傾向得点および自尊感情得点ともに有意な差は認められなかった。携帯電話使用時間が1日150分以上のものは、それ以下のものに比べて有意にインターネット依存傾向得点が高かった。なお自尊感情得点においては、有意な差は認められなかった。

2. 調査概要

調査対象者は、千里金蘭大学に在学する女子大学生141名(看護学科78名, 児童学科63名)とし、質問紙で調査を行った。

質問紙は、携帯電話を持つようになった時期、1日のうちで携帯電話やインターネットを使う平均時間(30分, 1時間から5時間以上と30分刻みで10段階)、戸部ら(2010)が開発したインターネット依存傾向項目^[3]、Rosenbergが開発した自尊尺度の日本語版^[4]、岡田(1995)が開発した友人関係尺度^[5]で構成し、無記名で調査を行った。

なお、戸部らが開発したインターネット依存傾向項目は、インターネット依存者に見られる特有の症状や判定に用いられる項目を児童生徒の発達段階に適合するように精選されたもので、11項目から構成されている。それぞれの項目に対して「よくある」3点、「時々ある」2点、「あまりない」1点、「ない」0点で回答を求め、合計点数を求めた。合計点数が多いほどインターネット依存傾向が強いことを示している。

Rosenbergの自尊感情尺度は、10項目からなり、「強くそう思わない」1点、「そう思わない」2点、「そう思う」3点、「強くそう思う」4点の4段階で自己評価させ、合計得点が高いほど自尊心が強いことを示している。

岡田の友人関係尺度は、3つの下位尺度「気遣い」尺度(6項目)、「ふれあい回避」尺度(6項目)、「群れ」尺度(5項目)からなり、「非常にあてはまる」4点、「ややあてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「全くあてはまらない」1点の4段階で回答させ、それぞれの項目を単純加算したものが、尺度得点となる。

また、統計処理にはSPSS19.0を用いた。

3. 調査結果

3-1 携帯電話を持ち始めた時期

表1は携帯電話を持ち始めた時期の回答結果をまとめたものである。中学校で携帯電話を持ち始めた学生が最も多く29.8%で、小学校高学年が27.0%であった。僅かではあるが、大学で持ち始めたと回答したものもいた。白石ら(2011)の調査と比較すると、全体的に低学年で携帯電話を所持する傾向にあると言える。

表1 携帯電話を持ち始めた時期

時期	人数	割合%	(2011)
小学校1・2年	9	6.4	2.6
小学校3・4年	22	15.6	6.8
小学校5・6年	38	27.0	17.1
中学校	42	29.8	41.5
高等学校	27	19.1	24.8
大学	3	2.1	7.3
合計	141	100.0	100.0

3-2 インターネット依存傾向得点

図1はインターネット依存傾向得点の度数をまとめたものである。得点の平均値は、11.67(SD4.60)であった。白石ら(2011)の調査では、平均値が7.72(SD4.22)であり、今回の調査ではインターネット依存傾向の得点が若干増加している様子が見られる。

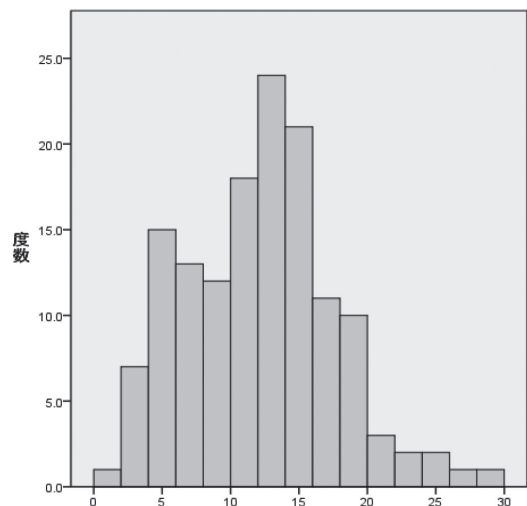


図1 インターネット依存傾向得点の分布

3-3 自尊感情尺度得点

図2は自尊感情尺度得点の度数分布を示したものである。得点の平均値は、26.21(SD2.27)であった。白石ら(2011)の調査では、平均値が25.35(SD3.05)

であり、自尊感情尺度得点はあまり差が見られなかった。

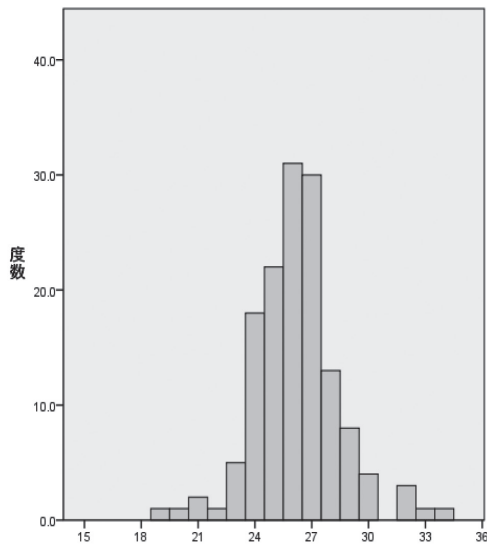


図2 自尊感情尺度得点の分布

表2 利用時間ごとの各項目平均値

利用時間	人数	依存傾向*	自尊感情
0.5時間未満	1	1.00	24.00
1.0時間	5	6.80	25.40
1.5時間	3	8.33	26.00
2.0時間	12	9.33	26.17
2.5時間	9	11.11	24.33
3.0時間	20	11.00	26.70
3.5時間	10	9.80	26.50
4.0時間	22	12.45	25.59
4.5時間	11	12.36	25.73
5時間以上	48	13.44	26.83
合計	141	11.67	26.21

(依存傾向*：インターネット依存傾向得点)

表3 利用時間ごとの友人関係尺度の平均値

利用時間	人数	友人関係尺度		
		気遣い	回避	群れ
0.5時間	1	15.00	17.00	15.00
1.0時間	5	15.60	16.40	13.20
1.5時間	3	18.67	16.67	13.67
2.0時間	12	16.42	16.58	11.58
2.5時間	9	16.00	14.89	13.78
3.0時間	20	16.50	15.25	13.85
3.5時間	10	16.60	15.50	12.80
4.0時間	22	16.50	14.77	13.45
4.5時間	11	17.73	14.27	14.64
5時間以上	48	15.81	14.85	13.48
合計	141	16.33	15.16	13.43

3-4 携帯電話の利用時間と各項目の関連

携帯電話の1日平均使用時間ごとにグループ分けを行い各尺度得点の平均値をまとめた(表2, 表3)。なお、携帯電話を1日に4時間以上しているものが調査対象者の半数以上を占めていた(81名・57.4%)。

携帯電話利用時間が1日0.5時間未満のものは1名でありインターネット依存傾向得点も1点と低いため外れ値とし除外しても、利用時間とインターネット依存傾向得点のスピアマンの順位相関分析を行ったところ、弱い正の相関が見られた($r_s=0.293, p<.01$)。携帯電話の利用時間が多いものは、インターネット依存傾向得点が高い傾向があると言える。また、利用時間と自尊感情得点の間には、ほとんど相関関係は見られなかった($r_s=0.158, p=.061$)。また、利用時間と携帯電話を持ち始めた時期との関連も認められなかった(表4)。

表4 利用時間と依存傾向・自尊感情点数の相関

	時期	依存傾向	自尊感情
相関係数	.036	.293**	.158
有意確率	.672	.000	.061

また、携帯電話の利用時間と友人関係尺度の3つの下位尺度点数の間についてもスピアマンの順位相関分析を行った(表5)。携帯電話の利用時間とふれあい回避尺度間に弱い負の相関が見られた($r_s=-0.219, p<.01$)。

表5 利用時間と友人関係尺度点数の相関

	気遣い	ふれあい回避	群れ
相関係数	-.042	-.219**	.090
有意確率	.618	.009	.288

3-5 携帯電話の持ち始めた時期と各項目の関連

携帯電話を持ち始めた時期を、小学1・2年生、小学3・4年生、小学5・6年生、中学生、高校生、大学生の6グループに分け、各項目について一元配置分散分析を行った結果、有意差は認められなかった(表6)。

また、小学1・2年生を1、小学3・4年生を2、小学5・6年生を3、中学生を4、高校生を5、大学生を6と順序付けして、携帯電話を持ち始めた時期と各項目の尺度得点とスピアマンの順位相関分析を行ったが、有意な相関は認められなかった(表7)。以上により、携帯電話を持ち始めた時

期により各項目の尺度得点に違いが生じるとまでは言えない。

表6 携帯電話を持ち始めた時期を因子とする各項目得点の分散分析

	自由度	F 値	有意確率
依存傾向 群間	5	.224	.952
群内	135		
自尊感情 群間	5	1.068	.381
群内	135		
気遣い 群間	5	.355	.878
群内	135		
ふれあい 群間	5	.501	.775
回避 群内	135		
群れ 群間	5	.282	.922
群内	135		

表7 携帯電話を持ち始めた時期と各項目得点との相関分析

		時期
依存傾向	相関係数	.012
	有意確率	.885
自尊合計	相関係数	.025
	有意確率	.767
気遣い	相関係数	.005
	有意確率	.957
ふれあい 回避	相関係数	.084
	有意確率	.324
群れ	相関係数	-.031
	有意確率	.716

4. 考察

携帯電話を持ち始めた時期については、同様の調査を行った白石 (2010) と比較すると、より年少で持ち始める傾向にあった。ただ、その持ち始めた時期により、携帯電話の1日の利用時間に影響があるとは言えない。また、インターネット依存傾向得点も自尊感情尺度得点、友人関係尺度得点も有意差が認められず、違いがあるとは言えない。これらは、白石 (2010) の調査とほぼ同様の結果が得られており、携帯電話を持ち始めた時期によって影響があるとは言えないようである。

携帯電話の利用時間については、1日5時間以上利用している女子学生が34.1%と多数を占めており、1日のうち多くの時間を携帯電話の利用に費やしていることがわかる。また、携帯電話の利用

時間とインターネット依存傾向得点に弱い正の相関、利用時間と友人関係尺度の下位尺度「ふれあい回避」の間に弱い負の相関が認められた。つまり、携帯電話の1日利用時間が多い女子学生ほど、インターネット依存傾向にあると言え、友人と触れ合いたいと考えていることがうかがえる。友人と繋がってほしいという思いからSNS等の利用が増え、携帯電話の利用時間が増えている可能性もある。橋元 (2005)^[7] の研究によると、メール利用も含む携帯電話に関して「よく利用する人ほど、友人との深いつきあいを望み、人付き合いも上手」と結論し、社会的でコミュニケーションも活発な人が、コミュニケーション・ツールとしての携帯電話・携帯メールをよく使うと解釈している。また、岡田ら (2002)^[8] によると、携帯電話を持ち始める理由としては、「周りの友達が持ち始めたから」という意見が多く、「周りの友達が持ち始めたから」と答える背景には、携帯電話を持つことによって、友達といつでもつながってほしいという気持ちがあるからだとして示されている。つまり、携帯電話の利用には、友人とのつながりを重要視していることが考えられ、携帯電話の利用時間に影響があるのではないかと考えられる。

まとめ

本稿では、携帯電話を使用することにより、インターネット依存や自尊感情の違いが生じるのか、友達関係に影響があるのかについて調査を行った。

その結果、先行研究の結果と比べると、女子大学生が携帯電話を持ち始めた時期は早くなる傾向にあったが、持ち始めた時期が早いことにより、インターネット利用への依存度が強まったり、自尊感情に影響があるとは言えず、友人関係についても関連があるとは言えない結果となった。

携帯電話の1日平均使用時間については、携帯電話の1日平均使用時間が多い人ほど、インターネットに依存する傾向があり、友人と関わってほしい気持ちが強く、友人との深い関わりを望んでいると考えられる。また、自尊感情には変化が見られず、携帯電話の使用時間との関連があるとは言えない結果であった。

今回の調査は、女子大学生を対象に行った。その結果、女子大学生は、友人と関わってほしい、常に繋がってほしいという思いから、携帯電話を長時間使用し、インターネット依存傾向が強まっ

ているのではないかと考えられる。しかし、男性を対象として同様の調査を行えば、また違う傾向が見られるのではないかと思われる。携帯電話を利用する上で、女性と男性でどのような心理状態の違い、友人関係の違いがあるのか比較調査することが今後の課題である。

引用文献

- [1] 文部科学省 (2009). 子どもの携帯電話等の利用に関する調査
- [2] 白石龍生, 長光李恵, 千田幸美, 上野奈初美 (2011). 携帯電話の使用と自尊感情との関係. 大阪大学紀要第Ⅲ部門, 60(1), 51-56
- [3] 戸部秀之, 竹内一夫, 堀田美枝子 (2010). 児童生徒のインターネット依存傾向とメンタルヘルス, 心理・社会的問題との関連, 学校保健研究, 52,125-134
- [4] 内田知広, 上埜高志 (2010). Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58(2), 257-266
- [5] 岡田勉 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察, 教育心理学研究, 43,354-363
- [6] 仲栄真美奈子, 國吉和子 (2006). 携帯電話と人間関係に関する研究(1) —携帯電話使用と友人関係・家族関係への影響—
- [7] 橋元良明(2005). 第17章 パーソナル・メディアの普及とコミュニケーション行動—青少年にみる影響を中心に— 竹内郁郎・児島和人・橋元良明(編著), 新版, メディアコミュニケーション論, 北樹出版, 326-345
- [8] 岡田朋之・松田美佐 (2002). ケータイ学入門, 有斐閣

